

---

# 初音ミクの物語

水瀬藍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初音ミクの物語

### 【Nコード】

N8291E

### 【作者名】

水瀬藍

### 【あらすじ】

いまでもない時、ここでもない場所。

芸術の最盛期にあった世界で、ボーカロイドは生まれた。

音も言葉も声も、それだけでは何も救いはしない。

けれど「本当の歌」は、きっと何かを救うことが出来るだろう。

## プロローグ

夢を見た。

夕焼けの彩る世界が美しかった。

全てを塗りつぶすような鮮やかな赤の空が

いや、違う。何時か何処かで見た光景。

至るところで上がる火の手。逃げ惑う民衆の嘆き。

街が、燃えていた。

遠い日の記憶だ。

いつの時代も、小国は容易く滅ぼされる運命にある。

そのことに不条理を感じても仕方が無い。

滅ぼすための剣でしかない自分は、与えられた任務を機械的にこなすだけ。

燃え盛る居城に、足を踏み入れる。

包囲された城のなかには、まだ人がいた。主を含む王家の人々が。

しかし、脱出する様子は見受けられない。

彼らは知っている。生き残れば、また争いが起きるだろうことを。

だから自ら、国とともに幕を引こうとしているのだ。

ふと感傷に浸る自分を見つけ、戒める。

同情をしたところで、彼らを救うことは出来ない。

確信をもって通路を奥へと進む。後宮の中央、大広間に詔えられた舞台。

歌姫が、そこにいた。

年の頃は十七、八というところだろうか。

少女と女性の狭間の、独特の儚い危うさを纏っていた。

しかし瞳に宿るのは、誇り高く力強い光。

哀しみを湛えながらも、決意とともに燦然と輝いている。

彼女はこちらに気がつく、臆することなく真っ直ぐな視線を向けた。

年下の少女の視線を受け止め、足を止める。

外壁の崩壊する音が、内部にまで伝わってくる。

もう終演は近い。あとは王家の人々、そして歌姫の行く末を見届けるだけ。

一瞬、言いよつの無い感情を込めた彼女の視線が絡まり、逸らされた。

そして、彼女は歌う。

慈愛に満ち溢れた歌声を、惹かれやってきた精霊たちが街へ届ける。

人々の哀しみを癒しながら、切なくも優しい旋律が世界を流れていった。

歌姫を護るように、あるいは讃えるように、精霊たちの輝きが溢れだす。

どうして歌姫を魔女といって畏れるのだろうか。

これほどに人の心を動かす術が、他に思い当たらない。

精霊たちに祝福されながら、炎が彩る舞台上で想いを紡ぐ歌姫。奇跡が途絶えるそのときまで、彼女は歌い続けていた。

## 「1・1」 アナタとカノジョ

「もしもーし！ 朝だよ、起きろー！」

カーテンがレールを滑る爽快な音とともに、高く澄んだ女の声が意識下に響く。薄目を開くと、眩い陽光が室内を満たしていた。ベッドの側では、いつものように同居人の望が腰に手を当てて仁王立ちしている。

「ほら、今日も朝早いんでしょ？ さっさと起きる！」

「ううん…… もお、あさあ？」

毎度のことだが、眠りについた時間が遅かったせいで身体全体がだるく、脳内も霞みがかっている。すぐには浮遊感から抜け出せそうにも無かった。

「そだよ、っていうか。キモイ声だすな」

「んー、ちよつとだけえ……」

寝ぼけ眼の俺は、横たわったまま返事をする、布団を被りなおして寝返りをうった。

「二度寝もするな！ まったく、もう」

働かない頭で漫才半分の怒りと呆れた溜息をなんとか認識して、視線を望に固定する。

肩で揃えられた艶のある黒髪。ぱっちりとした意志の強さを感じさせる瞳。瑞々しくも柔らかそうな唇。成人したばかりの小娘だが、顔立ちも少女のそれではなく女性らしさを印象づけるようになってきた。いわゆる「いい女」に近づいている気もする。

「…… お前、綺麗になったな」

「ええ？ な、なによ。寝ぼけてるの？」

唐突な褒め言葉に焦る望。だが口説いているわけではない。自分でも、何を言ったのか分かっていないのだから。ということは、やはり

「…… つるぺた」

寝ぼけていた。

「っ！ 一生、寝てなさい！！」

「ぐあっ！？」

振り上げられた鋭い何かが、俺の無防備な腹筋を破壊した。

望が朝食を作っている間に一通りの身支度は終えて、悠々と食卓に着く。いつもよりも余裕のある時間。だが代償は大きかった。負傷した腹部がまだ、鈍い痛みを訴えている。

「ったく、俺が低血圧で朝に弱いこと知ってるだろ？ 少しは手加減してくれ、お前の蹴りは尋常じゃない」

焼いたトーストにマーガリンと葡萄のジャムを塗りたくりながら、向かいに座った望に文句をぶつける。だが望は、自分こそ被害者だという顔をして俺を睨みつけてきた。

「あのね、寝言でも言っちゃいけないことがあるでしょ。因果応報ってやつよ」

「だからって、ここまで…… 今日は何やらかしたんだ？」

我ながら情けないが、寝起きの行動は全く覚えていない。日常的な応酬とはいえ、望のかかと落としの威力によって、度合いは分かるものだ。今日のそれは相当だった。もしも酷いことをしてしまっただのなら、きつちり謝らなければならぬかもしれない。

「…… あたしの尊厳に関わることよ」

「なんだ、それは？」

「いいから、気にしないで！」

話は終わりとばかりに苺ジャムを満面に塗ったトーストを口にしないで、望はマグカップを手を取った。しかし、もやもやとした気持ちが治まらない。はつきりしないことに、俺は後味の悪さを感じていた。

「だけどな……」

「これ以上、傷口に塩を塗りこむような真似をしたら」

「……したら？」

怒りで顔を朱に染めながら、目の据わった望は暴走し始めた。

「女の子の恥ずかしい告白を大胆な歌詞にして、

新型の量産したボーカロイドに覚えさせて、

お披露目と称してコンサートを開催したあげく、

生中継で電波にも乗せて、

でもって全部あんた名義で、

なおかつ強要されて歌詞を書かされたんですう、

なんてモザイクかけてニユースで証言して、

ロリコン！ ニート！ 甲斐性なし！

って三拍子揃ったキャッチフレーズが付くようにして、

それでもって大人の都合作品集なんて作って、

世界中に無料配布しちゃって、

知名度ドンよ！？」

「……頭、大丈夫か？」

早口で捲したてる突飛すぎる話に、本気で心配になる。望のほう  
が恥ずかしさのために頬を紅潮させているのだが、それでも言葉は  
勝手に溢れてくるようで、訳の分からない流れになっていた。現  
実のものとなつたなら、確かに恐ろしいが。

「いいえ、それだけじゃ済まさないわ。

夢見る乙女の純情を踏みにじつたんだし、

あんたのせいで未だに生娘なんだし、

だからあたしは売れ残りで既に萌えがないのよ、

って、ちつがーうー！」

「……大丈夫か？」

「はあ、はあ、はあっ」

混沌とした混乱のなかで、ようやく自制が効いたらしい。望は言  
葉を止めて荒く息をすると、俺を真っ直ぐに見据えて言い放ってし  
まった。

「と、に、か、く！ 二度と、つるぺたって言うなあー！」

「……………」

「……あつ」

二人のあいだの熱が、一気に冷めるのが分かった。わずかに涙を浮かべる望を視界に映して、そして背筋を凍らせるほどの予感に苛まれて、ぎこちないフォローを試みる。

「まだ気にしてたのか……それは、本当に悪かった」

普通すぎて全く効果がなかった。

「っ！ もうやだぁ！！」

「ちょっと待て、どこ行くだよ！」

「止めないでっ！ あたしは郷里に帰るのー！！」

それから望をなだめるのに、一億と二千年くらい費やしたとか費やさなかったとか。

「結局、いつもの時間じゃないか」

「ごめ って、悪いのあたしだけ？」

「いや……俺も悪かったけどさ」

「はぁ、なんだか疲れちゃった」

「……同じく」

朝食を済ませて、ソファでぐったりとする二人。外の賑やかさに反比例して、穏やかで静かな空気が流れる。チクタクという音だけが規則的に響き、望は壁時計を見やった。

「時間、平気なの？」

「慌てるほどじゃない。家を出る前に少しだけ作業しようかと思っただが……早起きは無謀だったな」

「まったくよ。今朝みたいなのは、もうごめんだからね」

お互いの溜息が重なって、小さな苦笑がこぼれる。散々に暴走して、気が済んだところもあるのだろう。すっきりした表情をしていて、俺はひそかに安堵していた。

「そういえば、また王宮から書状が届いてたみたいだけど……例の話なんですよ、受けないの？」

望のいう例の話というのは、秘密裏に開発されているアンドロイ



ドに歌を唄わせるといふ試みなのだが、単なる娯楽目的ではない。精霊の力を操る歌姫の奇跡を再現しようとする大掛かりなプロジェクトだった。

「受けた結果どうなったか知ってるだろ？」

「そうだけど、今度こそ」

「所詮、機械は機械だ。歌姫にはなれない」

「……歌姫は、もう居ないんだよ？」

望の一言に沈黙で応える。俺自身わかっていることだが、そう簡単には消せない傷がある。だから機械には無理だと決めつけ、言い訳を作って逃げているのかもしれない。そう理性で分析しても、行動には移せなかった。

「また本当の歌、聴きたいなあ」

「……ディスク貸してやろうか？」

「そうじゃなくって！」

はぐらかそうとする俺を咎めるように声を上げる望。それならば、本音ではない理由で深入りを避けようとする。

「わかってるよ……でもなあ。いまのどこ、歌えそうな奴が居ないんだよな」

「ふうん」

納得していなさそうな相槌を打つ望。仕方なく、少しだけ考えていたことを口にする。

「あのさ、お前は唄わないのか？ そこらへんの歌い手に比べれば格段に上手いんだし、身近で手っ取り早いってのもあるが、お前なら本当の歌も」

「本当？ あたしになら本当の歌、唄える？」

「ああ、保証する」

「そっかあ」

望は嬉しそうに表情を緩めて、しかしすぐに正体のわからない陰を見せる。

「でも、ごめんね。やっぱり作詞家としての仮歌だけで十分よ。歌

いたって衝動があるわけでもないし」

「そうか、勿体ないな」

「いいの！ ほら、頼まれてたやつ」

言って立ち上がると、望は側の棚に置いてあったディスクを手にとって寄越した。

「相変わらず仕事はやいな」

「そう？ 出来が伴ってないかもしれないけど」

「そんなことないだろ、お前の詞は良いよ、凄く」

「あ、ありがと」

柄にもない褒め言葉に二人とも黙ってしまふ。

「そろそろ時間かな」

わざとらしく時計を確認して立ち上がると、望も背中をぽんと叩いて言った。

「ほら、行つてらっしゃい」

いつものように望の言葉に見送られて、俺は家を出た。

## 「1・2」めぐりあい

暖かな光を届ける太陽が堂々と空に上がる頃、街は活気を魅せ始める。夜中の平穏な静けさと対照して、朝市に始まる街の賑わいは世界でも随一だろう。

ここは王国の城下町、フィーネリア。先進国家として栄える一方、身分に関係なく創造に励むことのできる芸術の都としても有名である。

それは先年のクレス公国の滅亡により、音楽の中心が王国へと移ったことも関係しているのだが、元から絵画や建築という分野では隆盛を極めていた。むしろ音楽は、伝説の歌姫を失った現在では次第に影響力を弱めている。

街を南北に縦断する大通りに出ると、ますます喧騒は大きくなった。早朝は稼ぎに出る男たちで一杯になる路面列車の始発駅を通り過ぎ、そびえ立つ白銀の大聖堂を横目に進むと、王宮の前門に辿り着く。

白を基調とした淡い色彩が中心の王城は、訪れるものに威圧感ではなく感動にも似た何かを感じさせる。設計の段階から多くの芸術家が参加していたらしく、芸術の都ならではのアートが、城壁や内装、庭や塔、区画の隅々まで見受けられる。

俺は門番に身分証を提示すると、ごく当たり前のように城内へと立ち入った。赤絨毯を進み、まずは客間へ。そこで取次ぎをしてもらい、謁見の間へと通される。

全く畏れ多いことではあるが、対応の迅速さからして、俺が特別に優遇されている部分はあるのだろう。しかしながら基本的に女王は寛大な施政者で、暇があれば誰にでも謁見を許すし、身分不相応な意見を聞き入れたりもする。

女王からの直々の召喚で来たわけだが、俺に作曲家としての名誉があるなどと驕ったりはしていない。逆に申し訳ないほどで、なん

とか力になりたいとは思うのだが、黒い噂もある歌姫計画には賛同しかねるのが、正直な考えだった。

「お客様がお見えになりました！」

「どうぞ、お入りくださいませ」

おっとりとした口調でありながら、威厳をも兼ね備えた女王の声を受けて、俺は大扉をくぐった。

数分後、何故か俺は女王の後について裏庭に面するテラスへ向かっていった。

直接に訊ねることは出来ないが、二人きりで話したいということなのだろうか。謁見の間を出る際に冷やかな視線を送ってきた側近の表情を思いだす。それだけで気分が悪くなってきた。

「風が、気持ちいいですね」

女王の呟きに我に返ると、前方のテラスから吹き込む心地よい春風が感じられた。外へ出て、端のほうまで歩き、足を止める。衣装のことなどお構いなしに城壁に寄りかかった女王は、俺がくつろいだのを見て話しはじめた。

「さて、早速ですけれど。お話というのは、先日お願いしたボーカロイドの件です。その様子ではご承知のようですが、どうかお願いできないでしょうか？」

知らず知らずのうちに、軽い溜息が口をついていたらしい。失礼なことをしてしまったと反省するが、だからといって引き受ける話ではない。

「先日もお返事はしましたが、丁重にお断り致します」

「どうしても、ですか？」

「……前回で十分に懲りましたし、そもそも俺には荷が重い話です。機械工学の知識ありません。音楽家としての経験値も足りません。俺よりも適任が」

「それでも貴方にしか任せられないと、わたくしは考えています」

強烈な言葉で返事を遮られて、俺は黙り込んでしまった。それがどんな感情からか言い表すことは出来ない。ただ、女王に認められたという誇りのようなものはあった。

「貴方の曲には、心があります。」

笑顔があります。愛情があります。

哀しみがあります。涙があります。

何物にも染まらない、強い意志があります」

夢を語る少女のような横顔を、俺は阿呆のように見つめてしまった。女王の純粹で真剣な想いが痛いほどに伝わって、そして期待されることを嬉しいと思ってしまった。

「もしも歌姫が貴方の曲を唄っていたなら……そのように夢想すれば、実現させてみたくもなります。ただの理想かもしれませんが、誰かが幸せになれる世界を夢見たいとは思いませんか？ わたくしは、叶さまの最後の精霊歌にも同じような願いが込められていたように感じました」

誰もがそう思っただろう。あの日、あの時は。だが歌姫は失われ、人々の心から消え去ろうとしている。誰かが平和の祈りを奏で続けなければ、危うい世界は崩壊してしまう。

普通ならば喜んで受けていい話だ。本当の歌が唄えるかどうか、そんなことは関係なく挑戦していいはずだ。こんなにも素晴らしい称賛を与えて貰ったのだから。

だがやはり、過去の記憶と罪の意識が何処かで引っかかっている。歌姫が失われた原因でもある自分が、歌姫を蘇えらそうとしていることが皮肉に思えてしまう。

「……申し訳ないのですが。もう一度、お時間を頂けないでしょうか」

「それは勿論ですわ。揺らいでくださっただけでも、嬉しく思います。本心を伝えることができて良かった」

「女王は、どうして音楽に執着なさるのですか？ フィーネリアは

音楽がなくとも、芸術の都としての地位は確立しているでしょう」

「わたくしが音楽を愛しているから、という理由ではダメでしょうか？」

「いえ……そうですね。それでは、どうして歌姫にこだわるのですか？」

歌姫による精霊の調べが失われた現在、音楽の分野では教会の先導する聖歌が広まりつつある。不安定な世の中で、信仰と芸術の利害が一致した結果だ。聖歌も精霊歌に見劣りのしない影響力があり、まだ過渡期ではあるが、次第に音楽の主流になっていくだろうと予想されていた。

「どうして、というほどの理由ではありませんけれど。ふたたび精霊歌が聴きたいと、そう願っているだけですわ。ただわたくしがそれを出来うる立場にいて、そして叶えたいと思うから行動する。それだけのことです」

事も無げに言い切って、女王は微笑んだ。

「この答えでは、ご不満でしょうか？」

「いえ……そういうわけでは」

失礼な話だが、女王にも俗人のような一面があるのだと知って驚いただけだった。願いがあり、望みがあり、欲があるのだと。女王の精霊歌に対する想いは、公務に私情を挟むほどの情熱なのだろうか。素直に、真っ直ぐに進めることが羨ましくもあった。

「お聞きしたいことがあれば答えますけれども、まだ何かありませんか？」

軽く首を振ると、女王は城内への入口に足を向けて言った。

「そうですね。それでは、最後に　わたくしがご案内致しますので、一目だけでも見て頂けませんか？　新しいボーカロイドを」

普段は滅多に人が立ち入ることのない区画、後宮のさらに向こう側。本宮に比べると、全くと言っていいほど飾り気のない神殿様式の建物で、表からは見えないせいか存在自体を忘れ去られたような

場所だった。足音が吸い込まれるように奥へと響き渡り、残響を置いて消えていく。

「こちらですわ」

女王が手をかけた扉の向こうから漏れ出す音に、俺は思わず息を呑む。

『ラーラーラーラーラーラーラー』

ラーラーラーラーラーラーラー』

衝撃だった。一般の歌い手には無理のある澄み切った高音の伸び。歌姫にしか唄えないだろうと、そう思いながら作り上げた曲の、最高音部分がとてつもなく安定して

『アーアーアー』

アーアーアーあゝ？』

訂正。まだまだ不安定なところもあるようで、急に調子の外れた音に思わずこけてしまいそうになる。隣で女王がクスツと笑ったのが分かった。

真鍮の扉を開いて聖堂に入ると、歌を中断した彼女が、あまりにも自然な嘆息をついてこちらを振り向いた。

「あつ……」

エメラルド色のつぶらな瞳が、初めに女王を見留めて、そして驚いたように俺を見つめる。青緑色のツインテールが揺れて、ステンドグラスから降り注ぐ光の粒子を反射した。

「お邪魔して、ごめんなさいね。様子を見に来ただけですから、お構いなく練習してくださいな」

来賓に対するものと変わらない女王の丁寧な言葉に、彼女はぺこりとお辞儀をして再び歌の練習に戻っていく。一瞬、戸惑いのような視線が向けられたように感じたのは、果たして気のせいだろうか。慈しむように彼女を見つめる女王に、俺は問いかける。

「本当に、あれが？」

確かに見た目だけなら旧型も人間らしくはあった。しかし言葉を話すというのは大変なことで、どんなに改良を重ねても流暢に喋る

ことなど出来なかったし、ましてや歌うことなど夢のまた夢だった。それなのに彼女は　ボーカロイドを否定してきたなかで、あっさりと認めたくはないが　歌姫に近いものを秘めていた。

「ええ。心というものは、本当に大切なものですね。あの子も、知能と感情の両方を備えて、初めて歌えるようになったのです」

「それに、あの曲は　」

「貴方にしか任せられないと、そう感じたのですから。貴方の曲を練習させるのは当然のことでしょう？」

あたりまえのように女王は言って、小さく単語を呟いた。

「　初音ミク」

「え？」

「あの子の名前ですわ。音楽の未来を切り開く、初めての音になることを願って。わたくしが名付けましたの。素敵だと思いませんか？」

「……そう、ですね」

苦笑混じりの俺の返事でも満足したのか、女王はふわりと微笑んだ。

「先ほどのお話どおり、お返事は後日で構いませんわ。それでも、あの子は貴方に託すことにします」

聖堂をでて謁見の間へと戻る道すがら、女王はそんなことを言い出した。

「しかし……」

「あの子の歌姫としての可能性を、貴方も感じたでしょう？　思うようにやってみてくださいませ。こちらの思惑など気にしなくても構いません。歌姫計画で何が起ころうと、あの子と貴方たちは必ず守ってみせますわ。それが、わたくしの役目。唯一、お力になれることですから」

女王の言葉、想いが信じるに値するものだ和理解して、とりあえず俺は頷いた。



「もし、未だに引っかかりがあるのなら……」

俺が表情を暗くしたこともお構いなしに、女王は続ける。

「お会いになられたら如何ですか？　きっと叶さまも心待ちにしていると思いますわ」

奇跡の歌声が、記憶の底から聴こえてきた気がして、かすかに胸の奥が痛んだ。

女王の勧めもあつたからか、俺は王宮を出たあと自宅には戻らず、郊外の寂れた一角に足を運んでいた。ミクは最終調整を終えて送られてくるらしいが、家には望があるので心配ないだろう。

街の喧騒からは遠く離れた、自然を囲む丘陵に建つ一軒の家。クレス公国の滅亡から四年。彼の地で失われた歌姫は、世間から隔離されて現在はいっそりと暮らしている。

コンコンツ。

木製のドアをノックして暫く待つ。来訪に対する返事は聞こえないが、近づいてくる気配を向こう側から感じた。そして、開かれたドアから覗く端正な女性の顔。

「久しぶり、だな。叶……」

突然の珍客に、叶は素直な驚きと喜びを表情に浮かべて、俺の手を取った。

俺をリビングに招き入れてソファに座らせると、遠慮をする間もなく叶はキッチンへと向かった。お気に入りの紅茶でもご馳走してくれる気なのだろう。楽しげに揺れる長い黒髪が、久々の邂逅を嬉しく思う叶の気持ちを伝えてくれるようだ。

この家を訪れるのは実に半年ぶりで、どうして疎遠になっていたかという、それはやはり初期の歌姫計画に安易に関わってしまったせいで、妙な罪悪感を抱いたからだ。もちろん叶は気にも留めていないし、むしろ喜んでくれた部分もあつたのだが、俺だけが勝手に空回りをして悩んでいる。

物憂げに溜息を漏らして、視線をめぐらす。以前と内装に大した変わりはなく、最低限に必要なものだけが部屋を飾っていた。自由な身でもないから仕方のないことだが、叶はそれを苦に感じていないらしい。公国での暮らしもさほど自由ではなかったらしく、慣れているのだという。

あえて違いを挙げるのなら、光の具合だろうか。俺の錯覚だとは思うが、屋内にしては明るく温かく優しいような気が「あつ？」

間抜けな声とともに、視線が一点に集中する。偶然に見つけた光の玉のようなもの。それは紛れもなく、精霊の姿だった。

慌ててキッチンの方に目をやると、トレイに紅茶のポットとティーカップを載せて、叶が歩み寄ってくる場所だった。俺の驚愕の表情と視線の先の精霊を見比べると、いたずらっ子のように叶は笑ってみせた。

『まだ、喋るとか歌うとかは、無理なんですけどね』

紅茶を淹れて一息ついたあと、叶は筆談で俺にそう伝えた。

『それでも、なんとか掠れた声は出るようになってます』

内心の動揺を静めるように、震える指でカップに手を伸ばし、一口啜る。香り高い味が広がって、何処か安心するようだった。柔らかい微笑みを浮かべた叶は、ただ俺を見つめるばかりで、何も問おうとはしない。

「その、あれは？」

よく目を凝らせば、叶の家には数多の精霊が隠れていた。人の心の光なる部分を実態化したような存在。とともに精霊歌を奏でるところと出来ない叶に、精霊たちは未だ付き従っている。

『不思議でしょ？ 鼻歌を唄ってみたら、集まってきたんですよ。うーとか、んーとか。頑張っても、発音できるのはその程度ですけど』

あの日、俺は叶の全てを奪ってしまったような、そんな感情を抱

いた。だが叶は、絶望なんてせずに生きている。そして再び、歌姫としての自分を取り戻そうと足掻いている。もし報われない労苦だとしても、そのことがどうしてか嬉しく、勇気を分け与えてもらうように感じた。

「聴かせてくれよ」

『鼻歌を、ですか？』

「ああ」

叶の歌声が聴きなくなつた。ひたすらに平和を祈って唄い続けた歌姫の、失われたと思つていた歌声を、俺は聴きたかつた。

『恥ずかしいですよ。それに上手く歌えないですし』

「それでもいいから……聴かせてくれよ」

食い下がって頼むと、叶は一瞬うつむいてペンを走らせた。

『わかりました』

変わらない威厳のままにずっと立ち上がって、叶が息を整える。

「ンンンンンンンンンンンン」

「ンンンンンンンンンンンン」

それは確かに頼りない歌声ではあつたけれど、精霊が集まつてくるほどには素晴らしく尚更に心に響いた。

「ンンンンンンンン」

「ンンンンンンンンンンンン」

鼻歌で数小節を唄いきつた叶は、久しぶりの披露に照れたようではにかみながら席に着いた。茶化されていると感じないように、心を込めて俺は小さな拍手を送る。

生まれた穏やかな静寂のなかで、叶は躊躇いがちにペンを動かした。

『私にも、聴かせてください。本当の歌を』

真摯な願いを訴えるように、じつと俺の瞳を見つめる叶。なんとなく落ち着かない気分になると、カップを手にとって口元にまた運んだ。

「……本当の歌、か」

帝国の兵士だった俺と、公国の歌姫だった叶が、こうして王国にて団欒を囲む姿には、不思議な感慨がある。女王が、昔そう言うて喜んでいたことがあった。国の境なく精霊歌が人の心を動かすことの、何よりの証明だと。だが世間での扱いは、脱走兵と故人。二人とも、身分を偽って留まっているだけの存在に過ぎない。

それでも確かに、俺は此処にいて歌姫と語り合っている。そして、平和の祈りを託されたのだ。それが唯一で、全てだった。

## 「1・3」 ワタシ

昼食時を過ぎ、カフェテリア通りが落ち着いてきた頃。ようやく、俺は自宅へ戻った。煉瓦造りの小さな家だが、望と二人で住むぶんには特別不自由していないし、五年近くも経てば愛着は湧いてくるものだ。

いつものように玄関扉を開こうとしたところ、何やら話し声が漏れ聞こえたので来客かと思い、軽く身だしなみを整えてから足を踏み入れる。

「キュウリ……違う、ピーマン。それはメロン」

「は？」

まず望の脈絡ない単語の羅列に疑問を覚え、続いて目前に浮かんだ光景に啞然とさせられる。なんというか　そう。シニールだった。

オープンキッチンの端に置かれた、大型冷蔵庫。引きこもりの多い音楽家二人には、作業前の買い込みが欠かせず、食料の収納スペースとして新調したもののだが、それはともかくとして。

「ブロッコリー、アスパラガス……パセリなんて買ったっけ？  
って、あれ？」

その冷蔵庫の下段、いわゆる野菜室に上半身を埋めた見覚えのある少女。彼女の横で、次々に差し出される野菜の名前を挙げていく望。

手品か何かのように右手左手と交互に現れる緑一色の野菜には、妙な感銘を受けたりもするが、とりあえず短いブリーツスカートから伸びたモロな太ももが目毒だ。

「おかえり、いつのまに帰ってたの？　あんたが遅いから、大変なっ！？」

望の声にはつとなり、慌てて目を逸らすが、遅かった。少女の差し出した細長い野菜を引っ掴むと、望はダーツの要領で俺の目に全

力で投擲した。

「ぎゃああああっ!!」

気をつけよう、目先のエロと、女の眼

望は説教をたっぷり三十分はしてから、キッチンへと入って作業を始めた。ごそごそと手元で弄っているのは大量のネギ。届いてもない生臭さを感じるのは、俺がネギ嫌いだからなのか……いや、単純に目に刺さったネギの匂いが染み付いているだけなのだが。

濡れタオルで目を擦り続けている俺の隣には、調整を終えて到着したミクがちょこんと座っている。先ほどの奇怪な少女と同一人物だと思えないほど静かで、俯いて恥ずかしげに顔を赤くしている。時折感じる窺うような視線がくすぐつたい。

「それで、ネギを探していたと？」

「そゆこと。ネギがエネルギー源の機械って何よ!! 正直まだ信じてないけど……試してみないと、仕方ない、でしょ!？」

力を込めてネギをすり潰しながら、望がぶつぶつと独り言を呟く。ほんの少しストレスが溜まっているらしい。きつとミクの対応に手を焼いたのだろう。もう少し早く戻ればよかったかと、俺は反省した。

「悪かったな。本当は、俺が家に居られたら良かったんだが」

「別に、いいわよ。それだけ、信頼して、くれてるってこと、でしよっし?」

厭味のような本心のような、微妙な言葉。だが俺は都合よく解釈することにした。

「ああ。助かった、ありがとう」

「……どういたしましてっ!」

ほんの少し作業を止めて複雑な表情をした望だが、おざなりに返事をするともた、ネギと格闘し始めた。相変わらず素直じゃないが、可愛い奴と思わないこともない。

黙ったままのミクと暫く待っていると、薄いエメラルドグリーン

の見るからに怪しげな液体をグラスに入れて、望が戻ってきた。

「えっと、ミクちゃん？　これで、いいのかな？」

躊躇いがちにネギジュースを差し出す望。受け取るミクも何故かおそろおそろだった。

「あ、ハイ。大丈夫……だと思いマスです」

「どうした、ミク　ちゃん？」

慣れない『ちゃん付け』をすると、望に笑われてしまった。俺自身ぎこちないとは思ったが、吹きだすこともないだろうに。

「あははっ！　似合わない！！」

「う、うるさい！　それじゃ、あつと……」

「ワタシのことは、ミクと呼び捨てにシテください。マスター」

『ま、マスター！？』

ミクの申し出に驚いて、思わず望と顔を見合わせた。そんな呼び名は一般的でないし、思いつく事例が少ない。

「マスターって言うと、あれか。酒場の　」

「違いマス」

容赦ないツツコミだ。機械にしてやられた俺って、一体なんなんだ。うなだれる俺に代わって、望が正解を口にする。疑いの眼差しを向けながら。

「主人ってこと？　こいつが、ミクちゃんのこと？」

「そうデス」

澁みなく簡潔に事実を述べるミク。こういうところは、人間の外見に相反して機械らしく感じられる。

「でも、ねえ？」

「これカラお世話になる身ですシ　」

「　　そんな話、聞いてないけど？」

じろりと漆黒の瞳が俺を見射るが、睨まれても困る。俺も聞いてない。

「ワタシの所有者は、マスターという設定デスから」

正直、してやられたと思った。女王は初めから、経緯がどうであ

ろうと俺にミクを託すつもりだったのだ。協力者の一人ではなく、唯一の所有者として。

女王の願い、叶の願い。いまだ荷が重い気はしているが、不思議と意欲は湧いてきた。俺が新たな歌姫を送りだすのだと、決意できた。だから

「わかった。よろしくな、ミク」

「ハイ、マスター」

「まあ、それはいいとしてだ。飲まないのか、それ？」

『……………』

誰もが忘れ去っていた。例の翡翠色の液体は、いまだミクの手のなかにある。

「アノ、王宮の外で異物を口にシタことがないので。それでチョット警戒しているのだと思いますデス」

主観なのか客観なのかよく分からないが、極めて冷静な判断をミクはする。これも機械ゆえなのだろうか。

「そういうことなら心配ないぞ？ 望はこう見えて、あくどい真似はしないからな」

「 どう見えんのよ」

「まあ、あれだ。さつき望も言っていた通り。試してみないと仕方がない」

「ハイ、それでは、飲みマス」

無責任に言いながら、ミクがグラスを傾ける様は固唾を呑んで見つめる。

「あ、コレです。このドロリとした食感、喉に絡みつくような粘り気、鼻につく異臭」

『……………』

反応に困って沈黙する二人。おそらく感想というよりは分析なのだろうが、どうしても不味そうにしか聞こえない。

「そのエネルギーの補給っていうのは、もしかして」



「一日一回で大丈夫なのですが……スミマセン、ご迷惑をお掛けシマス」

ボーカロイドの世話なんてしたこともない。慣れるまでは大変そうだった、望が。

「それで？ ミクちゃんがここに居るっていうことは、話を受けてきたの？」

「いや、そういうわけじゃないが……まあ、やることは同じだ」

王宮の歌姫計画がこれからの活動に支障あるかは不明だが、女王の心を信じてみるのも一興かと思う。疑いは消えなくとも、確かに歌への想いは見せてもらったのだから。

「ミクを歌姫にする」

「はあ」

「気の抜けた返事だな。どうかしたか？」

堂々の宣言のつもりだったが、望は呆れたように溜め息をついた。「別に。そんなことは分かってるのよ。具体的にどうするかってことを聞きたいの！」

「考えてない」

「……馬鹿？」

容赦なく一刀両断されたが、認めざるを得ないかもしれない。生来、後先を考えて行動するのは苦手だ。さて、どうするか。

「ライブは無理か」

「いきなりは無理でしょ。まずはミクちゃんっていう歌姫候補を認識させないと」

物珍しそうに家中の探検をしているミクを傍目に見ながら、望は頼杖について考え込んでいる。その横顔を俺は何気なしに見つめていた。

「やけに乗り気だな」

「そう？」

「なんとなくな」

いつも仕事に向かうときの真剣さとはまた違って、楽しそうにも見える。期待感といえいいのだろうか。わくわくするような弾む空気を感じていた。

「あんたがやる気になったなら、手伝うわよ。微力ながら、ね」

「いや助かる」

「……ばーか」

視線は交わさずに、相変わらずミクのほうに目を向けながら望と計画を練る。

「やっぱり最初は、ゲリラライブかしらね」

「そうだな」

「オリジナル曲は？ 何曲、歌えるの？」

「わからん……ミク、ちょっと来てくれ！」

呼びつけて質問してみると、ミクは困ったように答えた。

「えっと、いくつかマスターの曲は練習していますケド、まだ完璧ではナイです」

「タイトル教えてくれる？」

望に促されて挙げた曲は、どれも歌姫用に夢想しながら作ったもので難易度の高いものばかりだ。

「いきなりそれは……」

女王の本気は垣間見えるが、無謀ではある。完璧に歌いきることが出来なければ、曲の存在価値がなくなってしまつから。精霊歌とはそういうものだ。

「新曲を作つたほうがいいかもね」

「そうするか」

最終的に歌姫という境地に辿り着けばいい。焦ることは何もないのだ。俺達にはまだまだ時間がある。ゆっくりと着実に歩いていく、三人で。

「はい、ますたー。ずばりテーマは？」

「茶化すな……そうだな。跳躍、とでも」

## 「2・1」 跳躍

昼食を摂ろうと今朝から続けていた作業を中断してリビングへのドアを開く。そこにはミクが先客でいて、ネギジューズ入りのカップを両手に抱えて休憩していた。

「ミク」

「あ、マスター。お疲れ様デス！」

「調子はどうだ？」

「バッチリです！ 望さんがとても気遣ってクレルので」

体調管理や一般常識の学習など、ミクに関わることは全て望が請け負っている。曰く、女の子の世話を男がするなんてセクハラも甚だしい、ということらしいが。なんだかんだ理由をつけながらも、俺の私用といえる仕事に付き合ってくれる望には、有り難さと申し訳なさの念が堪えない。

「それで望は？」

「お買い物に行つてクルといってマシタ。昼食は作るカラ、いんすたんとで済ませないヨウにと、伝言デス」

「そうか」

頷いて、ミクが座っているソファの隣に腰掛けた。

「望サンは、歌唱指導が上手デスね」

「あいつは歌も上手いからなあ」

「丁寧二教えてくださつて、ステキな人デス」

「素敵……ねえ」

酷い仕打ちの数々を思い出しつつ、望のことを考えていると当人が帰ってきた。噂をすれば何とやら、ということか。

「ただいまー」

「あ、お帰りなさいッ！」

ミクは嬉しそうに迎えに出ていった。レッスンを始めてから三週間ほど経つ。すっかり望に懐いてしまって、彼女のほうがミクのマ

スターらしい。

「休憩はもう済んだ？　一息ついたら再開するから。発声練習して待っていてくれる？」

「ハイ、わかりマシタ！」

カップの中に残った緑色の液体を一気に飲み干すと、余りある元気を撒き散らしながら練習室へと駆けていった。望はそれを温かい眼差しで見守っている。

「こうしてみると、姉妹みたいだな……」

「え？」

何気なく微笑ましい心持ちになって口をついたただけの言葉だったが、意外な反応をされて困った。望の表情が見るみるうちに強張るのが分かる。

「いや、悪い意味じゃないぞ？　けしてお前のお子様体形がミクと同類だとか、そういうわけじゃ」

「レスン中、寝てていいわよ？」

毎度のことだが藪蛇なフォローをしてしまい、怖い顔をした望の鉄槌を食らう。空腹の胃で蹴りを受け止めるのは辛すぎた。

「つてえ……無闇に足を振り回すな！　スカートの中が丸見え」

「そろそろ必殺技の名前でも付けたほうがいいかしら？」

「……失言が多いな。気をつける」

「そーしてちょーだい」

お決まりの漫才にぐったりしていると、部屋の扉を開け放しにしているのかミクの歌声が響いてきた。さっそく発声練習を始めたようだ。初等教育でやるような代物だが、いまのミクには一番効果がある。

『ドレーミーファースーラーシード』

「だいぶ癖がなくなってきたな」

「そうでしょ？　元々、歌つてるときは良かったけど、最近は喋りでも機械訛りが薄れてきたと思うのよね」

まだまだ人間のように滑らかには発音できないが、それでもパツ

と聴いただけでは勘違いするかもしれない程に成長していた。それもミクの頑張りようは勿論だが、やはり望の歌唱指導が上手いのだろつ。

「努力の賜物か」

「ミクちゃんは、ホント努力家だからねー。歌うのが好きなのか、歌うことしか知らないのか分からないけど」

心配のせいか愚弄のつもりか、揶揄するように望が言い捨てた。

言い訳に聞こえるかもしれないが、二人ともミクへ注ぐ想いは本物だ。しかし、あくまでも機械に過ぎないということは事実として受け止めている。

「……そうだな」

「ま、それを教えるのは、あたしじゃなくて、あんなんだろうし？　それが女王様の期待してる役割なんでしょ？　きつと」

「わかってるつもりだ」

買い物してきた食材を冷蔵庫に仕舞いこんでエプロンをつけると、望はキッチンに入った。昼食を作るのだろつ。少し張っていた気を緩めてソファに身を沈める、と望は小さく問いかけを残した。

「……ねえ？　なんで姉妹みたいだ、って思ったの？」

その真剣な色を帯びた声に、どうしてか俺は応えることが出来なかった。

慎重に曲と詞の兼ね合いを考えて、珍しくぶつかったりもしつつ、一曲目が完成したのはミクが家に来てから一カ月後のことだった。それからさらに一週間の練習期間を経て、ようやくお披露目の当日に至る。

「いよいよだな」

「そう、デスね……」

「緊張してるのか？」

「コレがそういう状態だというコトは知ってイマス」

軽い調整を行って、いまは出番まで控えている時間だ。リラックス

スして過ごすのが一番いいのだが、俺もミクも割と硬くなっていた。それぞれ大小あれど、何かしらの責任が肩に乗っかかっている。それが無自覚であつてもた。

望は会場予定のカフェに出向いて、オーナーに話を通していることだろう。馴染みの顔だから問題はないと思うが、少しばかり戻るのが遅いような気もする。

「マスター。あの、ひとつ質問をしても、イイですか？」

「ああ」

「どうして、ワタシは歌うんでしょうか？」

疑問と不安を抱えた声でミクは呟いた。人間同士であれば滑稽な会話だが、作った側と作られた側　人間とボーカロイドであれば、当たり前前に噴き出す疑問だろう。

「一般的には、理由もなく歌いたいという衝動が起きるものだが、歌いたいか？」

「……ワカラナイ、デス」

「まあ、そうだろうな」

歌姫としての可能性を模索するためだけに生まれたロボットなのだから、歌うという行為は単なるプログラムのひとつでしかないのだろう。専門的なことは分からないが、ロボットがそういうものである、という知識はある。ただボーカロイドが心を手に入れたという発明が、果たしてどんな影響を与えたのかは不明だ。

「歌うのは好きじゃないか？」

「いいえ、歌うコトは好きです。カラダも、ココロも、温かくなりマス」

そう。女王の誇張でもなんでもなく、ミクには歌姫としての素質が確かにあった。それは歌っているときの僅かな発光現象。そして温かいという感覚。これは精霊が集まっている証拠だ。望が初めて見たときには驚いていた。

「それだけで十分だ。歌うのに理由は必要ないが、欲しければ『好きだから』でいい」

「……………」

「それにな、俺はミクの歌を聴くのが好きだぞ？　もちろん望もそう思ってる」

「……本当デスか？」

「ああ、本当だ。俺達のために歌うのは嫌か？」

ミクは何かに縋るような上目遣いで俺をじっと見つめて、ふるふると首を振った。

「マスターや望さんが、喜んでクレルなら歌いたい、デス」

「そうか。楽しみにしてる」

「ハイ！」

「遅いつ！」

開口一番に望は文句を吐き出した。多少いらいらした様子も見受けられるが今日に限ったことではなく、単なるカルシウム不足だろう。牛乳飲めば全て解決だ、色々と。行く末が容易に想像できるので、もちろん口にはしないが。俺にも学習能力はある。

「もうピーク入っちゃってるじゃないのよ。正午前に着けと言ったわよね？」

「……そうだったな」

「ゴメンナサイ……」

先ほどの感動というか、ミクとの語らいの甘さは一瞬で吹き飛んだ。現実スケジュール管理をしているのも望である。うつかり戻ってくるものと勘違いして遅れたのだが、頭が上がらない。

カフェテリア通りの一等地に建つカフェ『ミストレース』　女

主人という意味だが、オーナーは親父だ。改築はしているものの由緒ある建築物で、最初のオーナーが女王への敬意を払ったとか、妻を愛してやまなかったとか、命名には幾つか所以ある話も残っている。そんなカフェの裏口に三人は集まっていた。

「様子はどうか？」

「うーん。最高なんだか、最悪なんだか……スペース空けただけで

何か起こると踏んだらしくて、だいぶ注目されてるわよ。オープンカフェのとこだから、立ち見もいるし。来るとき見てこなかったの？」

「裏通りから来たからな。あまり目立つのも考えものだし」

「そう。まあ、客寄せは成功って感じ……プレッシャーは大きいけど」

眉を顰めて望はミクを見やった。

「緊張してない？ 大丈夫？」

「大丈夫デスよ！ せーいっぱい歌いマス！ ちゃんと聴いててくださいネ？」

「え？ あ、うん」

心配が全くの杞憂であつたかのように余裕あるミクに、望は圧され訝しがった。

「……何かあつたの？」

「いや。ひとまず歌う理由を見つけたんだよ」

「なるほど」

端的な俺の言葉でも思い当たるところがあつたようだ。望も頬を緩めた。

この様子では今日のライブの成功は間違いない、そう思えることがなんだか嬉しくて、また歌姫としての未来がそう遠くないかもしれないと、初めて確信を持った。

ランチタイムのピークを過ぎる頃。ミストレースの店内はいつでもどおり落ち着きを見せはじめていたが、オープンカフェのほうはまだ混雑状態にあつた。

脇にセットされた簡易特設ステージには楽器が運び込まれていた。どこの馬の骨がゲリラライブをするのかと、多くの若者が好奇の視線を向けている。彼らは感受性が豊かで新しい刺激を受け入れ易いが、感じたままに率直な評価を下す。もしもミクの歌がつまらなければ、すぐに離れていくだろう。逆に惹きつけることが出来れば、



大きな力になる。

「どうぞよろしくお願いします」

裏で待機する俺と望は、二人の男性に向かって殊勝に頭を下げた。オーナーの私設バンドのメンバーに、ギターとドラムの助っ人を頼んだのだ。ちなみにベースが俺で、キーボードが望。俺たちはプロほどの腕はないが、それなりに演奏ができる。聴けさえすれば、普通でいい。あくまでもメインはミクの歌声なのだから。

「行きましょう」

四人がステージに登場すると、野次馬の群れからどよめきが上がった。それぞれの知名度がそうさせるのかもしれないし、併せて変則的なメンバー構成だからかもしれない。もちろん単純に、雰囲気盛り上げる意味もあるのだが。

「あー、こんにちわ。俺、です」

マイクで軽い挨拶をすると、一瞬でどよめきが引いていった。わりと有名なメンバーが揃っていることで好奇は消え、等しく抱かれるのは期待だ。すると野次馬が観客へと成り代わる。

「えっと。表立った活動は久しぶりなんですが、今回は初プロデュースのお披露目にやってきました」

緊張のせいかな、普段とは違う斜に構えた口調になってしまふ。横目に望の苦笑いが見えて恥ずかしくなったが、心臓の鼓動は高鳴っていく一方だ。

「歌姫計画と銘打って活動を盛んにしていきますので、応援よろしくお願いします」

言葉が切れると同時に歓声があがり、気分が高揚していくのが分かった。最近は作曲の提供しかしていなかったから、本当に久々の感覚だ。それは望も同じように感じている。そしていつかは

「それじゃあ、ボーカルの紹介……初音ミク！」

いつかは彼女も、歌う理由をこの空気のなかに見つけることが出来るだろう。

ドラムのリズムからミクが歌いだす。そして前奏へ。

響いた歌声に観客がざわめいた。ボーカルが人間ではないと、前方の気づきが後方へ伝播していき、無数の囁きが騒音と化す。しかしステージ上のメンバーは誰も揺るがない。想定していた事態だ。口で説明しても仕方がない。音楽で納得させるのみ。

『ラララー、ララララ、ラーラーラー

ララララー、ラララ、ララーララーラー』

軽快なドラムにギターとベースが乗り、キーボードが彩る。

ミクは一生懸命に、しかし笑顔で歌を唄っていた。純粹ゆえに一つ一つの音と言葉の意味を自分なりに解釈して、また教えられて吸収し伝えようとする。この姿勢こそがまさに歌姫そのものだ。

『ラララララララ、ラララー、ラララ

ラララララララ、ラララー、ララ』

一番のサビに入ったところには、観客の戸惑いは薄れかけていた。ミクの歌声が確かな説得力と感情をもって響き渡り、心を動かす。俺の曲、望の詞、ミクの声。三人が同じように抱く決意が込められている。

『ララ、ラララ、ララララー、ラララ

ララ、ラララ、ララララー』

二番のサビに入る前、わずかだが精霊が集まってきた。過去の伝説と化していたそれを目にした、観客が、メンバーが、息を呑む。

歌姫だ。誰かが言った。

拍手でリズムを取り始めた観客が見えた。

溢れる涙を止められないで、呆然と立ち尽くす女性がいる。

拍手の波が広がり、歓声と嗚咽と旋律と歌声が調和して、街を包み込む

間奏での転調、そこでやっと気づいた。俺も涙を流している。

『ラララララララ、ラララー、ラララ

ラララララララ、ラララー、ララ』

最後のサビ。誰もが高く掲げた手でリズムを取り、耳を澄ませて

聴き入っている。失敗の可能性なんて考えるまでもなかった。ミクは紛れもない、歌姫だ。

精霊の調べが強く訴えかけるのは、数多の歌姫が遺した平和への祈り。フィーネリアには滅びた公国からの移住者も多い。涙を流した人々は、おそらく思い出したのだろう。穏やかな日常と、それが失われたときの哀しみと、最後の歌姫が遺した精霊歌を。

一曲限りのゲリラライブが終わる。惜しめない拍手を送り続ける観客に、俺や望は感謝の意を込めて礼をする。ミクの表情は見えない。だがその背中は小さく震えていた。

「お疲れ様」

「ああ……望か」

「どうしたの？　ぼおとしちゃって」

「ちよつと、な」

満月の皓々と照らす夜更け。家の裏に広がる庭園へ望がやってきた。曖昧に言葉を濁すと、俺が座っている岩の隣へ腰掛けてくる。

「ミクは、もう寝たのか？」

「うん。やっぱり緊張して疲れちゃったみたいね」

「そうか……」

風が梢を打つ音に雑じって、酒場の喧騒が遠くに聞こえる。しかし辺りは静謐としていて、時間がゆったりと流れているようにも感じた。暫くのあいだ、二人は黙って夜風に身を委ねた。

「今日のライブ、大成功だったね」

「そう、だな」

齒切れの悪い返事に、さっそく怪訝な様子を見せる望。

「……何か不満なところもあった？」

「いや、そうじゃないんだが。順調すぎて怖いというか、そんな感じだ」

ライブ自体は、これ以上ないほどの成功だったはずなのだが、もやもやとした心持が拭えないでいた。不安要素が無かったといえ

ば嘘だが、大したことはない和高を括っていたのかもしれない。

「なあ、望。ミクが歌ったのか、ミクに歌わせたのか……どっちだと思う？」

「いきなりな質問ね。よく意図がわかんないんだけど、両方、じゃないの？」

曖昧な問いにも望は答えてくれた。おそらく深く考えてはいないのだろうが、その認識が現状を物語っているようにも思える。

「いまはまだ、歌わせてる状態なんだよな、きっと。望も言ってただろ？ 歌うのが好きなのか、歌うことしか知らないのか、判らないって」

「確かにそう言ったけど……でも、そんな気にしなくてもいいんじゃない？ 初ライブでミクは認められたわけだし、大丈夫よ」

表情に暗い影を落とす俺に向かって、軽く微笑みかけてくる。望の前向きな言動には、いままで何度も助けられてきた。だがそれでも、今回ばかりは嫌な予感がしていた。

「それよりも、次の曲なんだけどさ」

明るいついでに口調で企画案を話して聞かせる望。それは慎重な俺には考えも付かないものだった。成功すれば一気に知名度は上がるかもしれない。だがリスクは大きい。

俺は、頭のどこかで失敗するかもしれないと思いつつも、結局任せることにした。この心配が杞憂であればいいと願いながら。

「私は人間じゃないから、か……」

いつかのミクが呟いた一言が、重大な意味をもって迫るのを感じていた。

## 「2・1」 跳躍（後書き）

ライブでミクが歌った曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになれましたら、是非お聞きください。

『after resolution』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1449758>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=H0dE4IrZBVY>

|| H0dE4IrZBVY

## 「2・2」 人間じゃないから

鮮烈なデビューの余韻も冷めないうちに、俺達は次の曲を発表した。ライブではなく、ディスク流通で。先行情報のない正体不明な新曲は、発売日こそ伸び悩んだものの徐々に売れ始め、いまでは爆発的なヒットを飛ばしている。その要因には望が目論んだとおりの支持層があった。

「やっぱり女の子の噂って凄いわよねえ」

音楽番組をチェックしているところで、望が他人事のように話しかけてくる。もう深夜だ。欠伸まじりで、だいぶ眠そうだった。

「何をいまさら……口調が婆臭いぞ」

「なっ、失礼しちゃうわね、もう。現役バリバリの恋する乙女だってえの」

「……無理すんな、変」

「むう……」

望自身も「女の子」たちよりは年増だと自覚しているらしい。いじけて機嫌が悪くなるかと思っただ、凹みながらも紙を差し出してきた。

「細かいところは、ミクに教えながら直すから。まだ発音で不安なところもあるし」

受け取って目を通すと、ここ数日のあいだに何度か眺めた歌詞の決定稿が丁寧な筆跡で綴られていた。多少の差異はあれ似通ったものだが、大事なことなのだろう。俺に作詞は解らないが、その点を軽んじたりはしない。

「ああ、お疲れ。レコーディングは二週間後で大丈夫か？」

「えっと、たぶん平気よ。あの子、覚えが早いし。それに唄うのが楽しくなってきたみたいね、最近よく笑うから」

おやすみ、と望は自室に戻っていった。

デビューライブを成功させて次に望が提案したのは、若者をター

ゲットにした恋愛モノの制作だった。ポップでキュートという作曲への要求には苦勞したが、特に女子学生から評判が良く、噂が宣伝の代わりとなって売り上げ枚数を増やしている。来月には二枚目の発表と野外ライブも決まっており、すべてが順調だった。

『らららーら、らーらららー』

ててててて、てててててーてー』

ラジオからミクの歌声が流れてきて、三週連続の売り上げ一位を知らせた。放送塔の看板番組で、音楽を聴く人間は大抵このチャートをチェックしている。つまり大衆にとっての評価基準がここにあるということ、DJの軽い口調に俺は懸念の一端を見て取った。

『いやあ、凄いつすねえ！ この曲を歌ってる「初音ミク」は一期話題になったボーカロイドということ、科学もとうとうここまで来たかってカンジっすね！ ホント人間みたいですよね？ この機械の普及が始まれば、音楽の復興も間違いないでしょう！？ 未来の歌姫に期待したいところですっ！！ それでわ、またっ！ シーユーアゲイン』

果たして良いのか悪いのか予想外なことに、音楽チャートは「初音ミク」が六週連続の一位を獲得し、七週目に新曲が成り代わる形で推移した。望は素直に喜んでいたが、ミクは実感がないようだったし、俺は薄気味悪い感触さえ覚えていた。

この流行は異常だと、頭の何処かが警鐘を鳴らしている。だがやはり、俺は流れに身を任せた。何があるうと、歌姫計画の行く先を見届けなければならぬと思ったから。

二枚目の発売後、ようやく一息ついた俺は王宮へと足を運んでいた。ライブでの発言について、一応の報告と釈明をするためだ。

いつものように客間で待っていると、謁見の間ではなく執政室へ通された。理解しているつもりだが、やはり俺との会談は聞かれて困るものらしい。任せられた歌姫計画にリスクを負うのは女王だ。王宮内でも複雑な立場に置かれているだろうことが想像できる。

「失礼します」

「いらつしやいませ。どうぞお掛けになって？」

勧められるままに、家にあるものとは比べ物にならない高級そうなソファに腰掛ける。身体が深く沈んで、違和感と落ち着きのなさを感じた。

女王は暫らく書き物をしていたが、一区切りついたのかペンを置くと口を開いた。

「やってくれましたね」

唐突な一言だったが、何のことを指しているか心当たりはある。まさか知られていたとは思わなかったが。

「ああして宣言されてしまえば、そう簡単に歌姫計画で手出しはできないでしょうね」

女王は他人事のように笑うが、あれは王宮に対する布石だった。

全貌がわからない以上は、用心しておくに越したことはない。

「それにしても、凄い騒ぎですわね」

表情を緩めて多少の驚きを込めた口調で言う。

「今回の件は、もう？」

「ええ、耳にしています」

「……申し訳ありません」

「なぜ謝るのですか？ 全てお任せすると言ったはずです。それに、何か考えがあつてのことでしょう？」

歌姫計画を宣言したことは間違っていないと思うが、まさか王宮へ問い合わせが殺到するとは考えもよらなかった。だが、前回の歌姫計画は王宮が自ら公表していたのだから、不思議なことでもないだろう。単に俺の思慮が浅かったと認めざるを得ない。

「それは勿論ですが……実はですね」

かくかくしかじかと、ディスクの発売に至った経緯と目的を説明する。加えて、微妙に食い違う望の期待と俺の懸念をも。

「そつだと思っていました。貴方は慎重ですから、このような冒険をするとは思えませんし。望さんの発案なら納得がいきますわ」



「女王は、どのようにお考えですか？ 俺にはこれで良かったのか判らなくて……」

迷いをさらけ出すと、優しく微笑んで女王は応えた。

「結構なことじゃないですか。安全な道ばかり選んでいては、成長なんてしませんもの。確かに望さんの考えは甘いかもしれませんが、貴方の意見は尤もでしょう。けれど、失敗したからといって失うものがありますの？ 傷つかなければ解らないこともありますわ。それが人の心というものでしょう？ 痛みのない世界に、安らぎはありませんのよ。きつと」

数日後 俺たちは二度目のライブを迎えた。前回と同じく、ミストレースのオーナーをお願いして私設バンドのメンバーに助けてもらっている。

郊外の公園に建てられた野外ホールには大勢のファンが集まり熱狂的な空気が醸しだされていたが、何処か不穏な空気も肌を刺すように感じられた。それは一部の冷めた視線であつたり、巷で流れている風聞だつたりする。

『らーららららーららーらーらー』

らーららーら、らーららーららーらららー

ららららーららーら、らーらーらーらー

一曲目・二曲目と淡い恋を応援する歌が続く。俺のようなおっさんが真正面から受け取るには照れを感じるが、若者の多くは共感を寄せているようだった。狙いすぎた感も否めないが、曲も詞も若者たちの嗜好にぴたりと嵌っていた。しかし、だからこそ

「俺さん、すげえよな。天才だよ、天才」

「可愛い歌だよねえ。やっぱ詞がいいよ」

誰もミクには触れない。ボーカロイドが上手く唄えるのは当然。そういう顔をして聴き入っている。あくまでも唄っているのは「ボーカロイド」であり「初音ミク」という主体ではないのだ、彼らのなかでは。

静かな憤りと大きさを増す不安を腹に抱えながらも、ライブは表向き順調に三曲目を流していく。一番の人気を誇り、一番の批判を集めた歌。

『らーら、らーらー、らーらーらー  
らーら、らーらー、らーらーらー』

特徴的な前奏から軽快なメロへ、ミクの声を引き立てながら演奏が盛り上げる。若い世代を中心に客席からも合いの手が入り、一体感を持って曲は進んでいく。

『ンーンン、ラーラーラー、ラーラー、ラーラー  
ラーラーラーラー、ラーラーラー、ラーラーラー』

それでもやはり、導火線に火の点けられた爆弾は爆発するしかない。

二番が終わり間奏に入るとき、視界の端に飛来する何かが映った。それは軽い音を立てて、ミクの頭にぶつかる。投げ入れられたのは空のペットボトルだった。

ミクの「エッ？」という小さな驚きを、ヘッドマイクが拾って会場に届ける。

突然の出来事に、しんと静まり返った客席が今度は大きくざわめき始めた。野太い罵声がブーイングとなって膨れ上がり、野外ホールに地鳴りを起こす。スタッフの注意も全く意味を為さず、ついには観客同士で衝突が起きた。

暴力に訴えて混乱を起こそうとする者。焚きつけるように野次を飛ばす者。関わり合いにならないよう遠巻きに見ている者。感化されて罵詈雑言で反論をする者。彼らのなかに音楽は存在していなかった。

ステージ上はというと。助っ人の二人はさすがで、戸惑いはあるだろうが安定した演奏を続けている。しかし、望のキーボードは調子を崩して音を外しはじめた。盗み見たその横顔は青褪めて、動揺をあらわにしている。

長い間奏が明けても、とうとうミクは唄いだすことがなかった。

ただ無表情に、騒動の一点をじっと見つめている。この対比に人間と機械の本質を垣間見たような気がして、俺は心の奥で空しさを覚えた。

最後の最後で台無しになってしまった野外ライブから数週間。特に何をするでもなく、俺達は日々を過ごしていた。

相当のショックを受けたのか、望は部屋に引きこもって出てこない。レッスンはミクが自主的に練習しているだけだ。釣られるように俺も手慰みで曲の制作をしているが、いまひとつ気は乗っていなかった。

そして必ずやってくる朝。いまでは、望のかわりにミクが俺を起こしている。

「マスター。起きてください、マスター」

「んうー？ 何時、かなあ？」

「もうお昼ですますよ」

「丁寧の助動詞わあ、二重に使わないでおこうねえ」

「……寝起きのマスターは、キモイです」

どこで覚えたのか辛辣な言葉を吐き捨てられる。望のかかと落としが襲ってこないのは助かるが、ミクの言葉責めも如何なものか。

「ちゃんと寝たほうがいいぞお？ 隈が出るから」

「熊なんて出ません」

「……そう、だにゃあ」

いや。ボーカロイドの初音ミクが言う台詞としては尤もなんだが、何か壮絶な擦れ違いというか、ニュアンスの違いのようなものを感じるのは、気のせいなのだろうか。

「もう少し寝よう。ちゃんと寝たほうがいいんだ」

最近の眠りが浅いせいで疲れているのかと思い、安らかに目を閉じる。

すると傍らの気配は、諦めの溜息とともに足音を遠ざけていった。大人しいミクは強引に寝込めば放置してくれると踏んでのことだ。

しかし

とててつ。ぶんっ！ばしっ！

「いでえっ!？」

駆け寄る気配と風を切る音。頬を打つ地味な痛み。恐る恐る目を開くと、怒ったような表情のミクと視線が合った。その手にはなぜに野菜？ 疑問符はさておき、無意識にツツコミを入れる俺。やはり寝ぼけていた。

「ネギを振るなっ!」

「心持ち、頬が痛いんだが……」

「気のせいですますよ?」

「丁寧の助動詞は二重に使うな」

なんだこのデジャヴ。ご機嫌斜めのミクは、ぷいと顔を背けるとマグカップの中身を大げさに啜った。また寝起きに何かやらかしたのだろうか。

苦勞して覚醒を果たすと、俺は二人分の昼食を作った。普段は面倒でインスタントにしがちだが、一応自炊もできる。ネギジュースはミクが見様見真似で頑張っているが、望が作ってくれるものと違うと嘆いていた。どんな差があるのかは知らない。

ともかく、隣の部屋に望は居るのだが、実質ミクとの奇妙な共同生活が営まれていた。適度な時間にミクが俺を起こしに来てひと悶着起こり、食事を摂ってご機嫌を取り、あとは夜までそれぞれ作業をしている。夕食が済んだらミクの勉強時間になり、俺が教師役で一般知識や音楽を教える。

望がいらないおかげでと言うと罰当たりだが、俺とミクは以前よりも距離を縮められたように思う。望と交わすような他愛無い会話も出来るようになった。しかしだからこそ、物足りなさをも感じる。三人一緒という想いが強かったのだ。そしてそれは、ミクも同じだったのだろう。

「望さん、どうしたですか? わたしのせい、デス力?」

「いきなり何だ。ミクは悪くないぞ」

「でも、やっぱり。ワタシは人間じゃないカラ、歌を唄うのはオカシイから」

「誰も悪くないんだよ」

そう、誰も悪くない。世界にとってミクが存在は受け容れがたいものだから、今までよりも少しだけハードルが高い。それだけなのだ。

大勢の人の心を一つにする、なんて絵空事にしか聞こえないが、歴代の歌姫たちはそれをやつてのけている。もちろん少なからず障害があつたことだろう。人間じゃないから、機械だから。そんなことは些細な問題でしかない。俺達が目指している場所は、そういう頂なのだ。

「マスター。これを望さんに……」

「ん？」

手渡されたのは一枚の紙。無機質な文字が規則的に並んでいる。しかし拙い言葉を組み合わせ、自分なりの想いを形にしようとしているのが分かった。

「この詞は、ミクが書いたのか？」

「ハイ。わたしは人間じゃないけど、ココロがあります。機械だと感じられるし、考えることができます。望さんが悲しいのは嫌です。唄うことしか出来ないから、歌で元気にしたいです。わたしに……わたしに唄わせてください、マスター……」

それは強烈な意志だった。誰に強制されるでもない、誰かへと想いを伝えるための歌。これでいい。純粹な想いこそが歌姫にとって唯一の、そして最大の資質だから。

「望。ちよつといいか、入るぞ」

一応ノックをするが、応えないのは分かっている。俺は躊躇いがちに扉を開いて、部屋の中を窺った。真昼だというのにカーテンを閉め切つて電気も点けず、ふて寝するかのようにベッドでうずくま

る望。だが実のところ、全く眠れていないことを知っている。

窓際に寄ってカーテンと窓を開け放つと、新鮮な空気と光が部屋に入り込んできた。そしてようやく、望が俺のほうを向く。久しぶりに見た表情は、疲労感でいっぱいだった。

「お目覚めかな、お姫様。気分はどうだ？」

「……馬鹿？」

「いきなり失礼なこと言うな。昼飯もつてきてやったんだぞ」

「いつもみたいに置いとけば、そのうち食べるわよ」

望は言い捨てて、顔を背けるように寝返りをうった。

「残してるくせに」

「……うつさい」

罵倒にも力がない。参っているのがはっきりと分かってしまっただけに痛々しく思う。

昼食を載せたトレイを作業机に置いて、俺は椅子に腰掛けた。

「お前がここまで落ち込むのは珍しいからな。多少、心配してやらんでもないが。そろそろ引き籠もるのも飽きないか？」

黙りこんで応えてくれない望の様子に、俺は大げさな溜息をつく。

「そろそろ次の曲も作りたいぞー」

「……どうして？」

「うん？」

次回作の理由を聞かれたのかと思ったが、そうではなかった。のそりと身を起こして、望は俯きながら疲れた口調で喋る。

「なんで責めないの？」

「責めるわけないだろ」

当然のように言ってる。望はライブの失敗を自分の責任だと考えているみたいだが、とんでもない。確かにリスクの高い提案はしたが、それを許可したのはプロデューズをした俺自身だ。もし責任の在り処が必要なら、俺が負うべきこと。

それに今回の騒動は、起きるべくして起きたことなのかもしれないから。正直、仕方がないだろうと思っていた。

「あんたが心配してたとおりでたじやない……あたしだって機械  
としか、道具としか、見てなかったかもしんない。だから」

「やめろよ。お前は、ちゃんとミクと向き合ってる」

「……………」

どう慰めたらいいのか、どうすれば立ち直るのかなんて分からない俺は、最終兵器としてミクから託された紙を望に渡した。

「ほれ」

「なに、これ」

「ミクが書いたんだよ。望に渡してくれって」

「……あたしがいなくても平気ってこと？」

興味なさげに目をやって、自嘲気味に呟く。

「なに言ってるんだか。ちゃんと見てみるよ、こんな拙い歌詞なんだぞ？ 『私には歌うことしか出来ません。だけど、貴女がいないと歌うことすら出来ないんです』 っていうメッセージじゃないのか？」

「……………」

「俺が曲を作る。ミクが歌を唄う。お前が詞を書く。三人とも、最高の才能の持ち主だ。贅沢なグループだろ？」

「……自意識過剰」

言葉は辛辣だったが、それはいつものことだ。望は僅かに苦笑を漏らしていた。

「早く立ち直れよ。お前がいないと、困るんだよ」

結局のところ、望が自分で立ち直らないと意味がないことに気がついて、俺はお節介を焼くだけにとどめた。俺自身の言葉は何も伝えていない。ミクの気持ちを渡したただけだ。それでも、もう少し支えてやりたいと思う。

望の部屋をあとにしてリビングに戻ると、ミクが心配そうに俺を見上げた。子供にやるように頭を撫でて、言う。

「ミク。さっきの歌詞、覚えてるか？」

「エッ？ あ、ハイっ！」

背中にミクの返事を聞いて、立てかけてあつたアコースティックギターを手に取る。俺たちは不器用だから、やはり音楽で語るのが一番だろう。

「いまから適当に弾くから、合わせて歌ってみてくれないか？」

「わかりましたっ」

本当に適当に、それっぽいコードを繋いでいく。

『らーら、ららららら、らーらーらー』

慣れないアドリブでも一生懸命に応えようとするミクは、鼻奥目でなく健気で可愛らしく映った。この姿を見れば、これもいい経験だったかもしれないと思える。たったひとりに伝えようとする姿勢は、これからの成長に必ずプラスとなるはずだ。

『らーらーらーらーらーらー、らーらー、らーらー』

ミクの想いは、ちゃんと望に伝わっただろうか。真摯な歌声が届くことを願いながら、俺は演奏を続けた。



## 「2・2」 人間じゃないから（後書き）

ラジオ内で流れたものとライブで歌ったミクのイメージ曲はこちらです。

もし興味をお持ちになれましたら、是非お聞きください。

『晴れときどきにわか雨』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1568046>

sm1568046

YouTube

<http://jp.youtube.com/watch?v=CxFK8R1bjac>

CxFK8R1bjac

『SING&amp;SMILE』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1697854>

sm1697854

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=Y7guSGBRTQQ>

Y7guSGBRTQQ

『メルト』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1715919>

sm1715919

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=m4jkxXyCBgs>

m4jkxXyCBgs

## 「2・3」 機械だけど

翌朝、俺を起こしにやってきたのは相変わらずミクだったが、リビングに入るとホットミルクを啜りながら作業に没頭する、よれよれの望の姿があった。

「の、望？」

「なによ……眠いし疲れてるしで限界なんだから、何も突っ込まないわよ」

「いや、それはいいんだがな」

復活してくれたということに、自然と笑みが浮かぶ。俺は望の対面に座って、ミクが持ってきてくれたブラックのコーヒーを一啜りした。

「……………」

「　　はい」

テーブルの端に纏めた数枚の紙を手にとって、望が差し出してきた。俺はそれを受け取ると、さっと目を通す。

「これは……？」

「わかんないの？ 次のライブ用の曲、みつっ。一番上のが、ミクが書いてくれたのを弄ったやつ」

「マジでか。一晚で？」

「ん、徹夜で」

転んでもただでは起きない女。末恐ろしいな……望らしいっちゃ、らしいが。三曲それぞれ独特な詞だが、飛びぬけて異様なのがあった。これは

「これは　　歌えるのか？」

大量の漢字とルビの羅列、にしか見えない。意味がわからない単語もちらほら。それに指定されたBPMと歌唱領域。この速度で高音を伸ばすのはキツイだろう。

「大丈夫よ、ミクなら歌える……ねっ、ミク？」

「エツ？ あ、ハイっ！」

ミクは、久しぶりに望が作ったというネギジューズを、幸せそうに飲んでいた。勢いで返事をしたように聞こえたが、本当に大丈夫だろうか。

「あたしね、やられっぱなしは嫌なの。きちんとリベンジするわよー、がつんと言わしてやるんだから！」

盛大に凹んで何週間も引き籠もっていたはずの望は、瞳に闘志をメラメラ燃やしていたという。

望の指揮のもと、怒涛の勢いで曲の制作は進んでいった。望の頭のなかには完成形があるらしく、アカペラで歌って貰ったり、お互いに罵詈雑言のような話し合いをしながら、着実に曲を磨いていた。

メロディをつけるだけなら簡単だ。そんなことは誰にだって出来る。難しいのは、それを形にすること。そして、歌詞の世界観とのすり合わせ。なるべく多くの人々がイメージを共有できるような、そんな音作り。

音楽の良し悪しはプロかアマかで決まるのではない。俺たちのようなプロに求められるのは、何かに特化するにせよ、幅の広さを持つにせよ、純粋な完成度だ。期待に応えるということだけ。

だが、作品を送り出したいわけではない。いまの俺たちが贈るべきものは

『どう？ おっけー？』

レコーディングルームにて。三曲をノンストップで歌い終えたミクに駆け寄って、その頭を撫でながら、望は誇らしげな視線をブースにいる俺に向けた。

『ああ……完璧だ。これでいこう』

OKサインを出す。久しぶりの高揚だ。

今回は、ディスクの流通に先駆けてライブを行う。望の希望どおり、がつんと言わせるためだ。女王に掛け合って、電波塔とも話を

つけた。生中継でのスタジオライブになる。失敗すれば後がないが、この出来なら、きっと大丈夫だ。

「なあに、小難しい顔してるのよ」

レコーディングした素材を吟味しながら物思いに耽っていた俺の隣に、望が腰掛ける。

「いや、なんでもない」

「なんでもないってことないでしょ……まだ、心配事でもあるの？」  
ほんの少し真剣味を帯びた声で、望が俺の様子を窺う。初ライブの日の夜が、この状況に似ていたかもしれない。あのとき望は、ミクの未来を樂觀視していた。しかしながら今は不安げで、表情にも影を落としている。

「心配事というか。曲の良し悪しは俺たちが決めるもんじゃないかな。どう評価されるのか、って考えてたところだ」

「……そっか。そう、だよな」

「まあ、気にしても仕方ないけどな」

ふっと笑い飛ばした俺に対して、望は無言で俯いた。前回のライブをまだ引きずっているのだろうか。あの事件は曲自体が悪かったわけではない。望の戦略は妥当だったし、現にある面では成功しているのだ。しいて言うなら時の運、だろう。

オーディエンスも結局のところ人間だ。この世の中で正当に評価されている作品なんて皆無に違いない。世間の風潮や個々の好みや他楽曲との比較で、相対評価されてしまう。だからもしかしたら、ミクもここで終わってしまうかもしれない。けれどそれもある意味で当然の淘汰だと言える。だから本当に、考えても仕方ないのだ。

「お前は笑っているよ」

「えっ？」

機材を弄りながら、声だけを望に向ける。

「らしくないぞ。考えるより先に手が出るタイプのくせに」

「大きなお世話よっ！」

後頭部を平手で叩かれた。

「いつてえ……あのなあ」

振り向こうとして、両肩にかかった柔らかな重みに動きを制された。身を固くした俺に対し、望は耳元で囁きを残して離れる。

「……ありがとう」

俺が振り返ると、望は悪戯っぽく照れくさそうに笑った。

「おはよう、ミク」

「ま、マスター！？ ど、どど、どうしたんデスカ!？」

ミクが機械らしくもなく、大げさな驚きを見せた。俺が一人で起きるのは、そんなに不思議だろうか。リビングの壁時計を見やると、短針と長針が真っ直ぐ伸びていた。つまりところ、午前六時。ああ、なるほど。よく起きられたな、俺。

「なんか目が醒めた。何気に緊張してるのかもな」

「キンチョー、ですか……」

「ああ。ミクは？」

いつものように目覚めの一杯を淹れてくれるミクに礼を言っ、聞いてみた。

「わたしは、そんなにキンチョーはしていません。初めてのときは、ワクワクする感じがあったからですケド、今日はそうじゃないから」

「そうか」

「ハイ」

まだ望は起きてこないが、時間的にはそろそろだろうか。俺とミクはソファに並んで座り、ぼおっと朝陽が昇る様を眺めていた。小鳥のさえずりを聴くのも何時ぶりか。たまには早起きも悪くないと思う。

「ミクにとって今日のライブは何だ？」

「……リベンジ、でしょうカ。わたしは望さんの期待に応えたい。望さんの書いてくれる詞が、わたしの伝えたいことデス。わたしのココロから溢れた感情を言葉にしてくれるのは、望さんだけデス」

熱情のこめられた言葉から、ミクの望に対する絶対の信頼が見て取れた。だが危うさのようなものも感じ取れる。あのライブ以降、彼女にとって観客は敵なのだろうか。

「ミクは人間が好きか？」

「マスター？」

「感情があるのは……心があるのは、良いことばかりじゃない。誰もが愚かしさや醜さを曝け出してしまふ。黒い部分を閉じ込めてはおけない。もちろん俺や望も……あのライブの舞台上で、何を感じた？」

俺の問いにミクは難しい顔をして、アーカイブの底から記憶を引っ張り出してくるようにして、ゆっくり答えだした。

「よくわかりませんです。色んな感情が渦巻いて、でもそれを認識できなくて。ただ……アア、コレガニンゲントイウイキモノナノカ……って。光に包まれた精霊さんが、わたしの方を見て、泣いていました。わたしは、ココロが痛くなりました」

まるで人のように、ミクは左胸に手を当てて苦しそうに表情を歪めた。

「人間が好きか、という問題には上手に答えられないです。だけど、望さんのことは好きです。女王さまも好きです。オーナーも好きです。マスターのことも……好き、です」

顔を上げて、どこか必死に熱っぽい視線を向けてくるミク。俺は宥めるように青緑色の髪を撫でてやった。

「嫌われてなくてよかったよ」

二人のあいだを若干の気まずさが満ちそうかというところで、望の部屋から目覚ましのけたたましい音が鳴り響いた。俺は空のカップを手にとって立ち上がる。

「ミクは……人間になりたい、とか思うか？」

「……いえ。わたしは機械ですから」

電波塔管轄の某スタジオ。特設されたステージの上で、ミクは出

番を待っていた。今回は『ミストレース』のオーナー率いるバンドに演奏を依頼し、俺と望は観客席の後ろから傍観している。店は臨時休業らしい。

放送開始までの時間は僅か。音響やら照明やらの最終チェックに余念がなく慌ただしいスタッフに対し、ミクとバンドメンバーは落ち着いた雰囲気ですタンバイしている。いまひとつ落ち着きがないのは

「おい。なんでお前が緊張してんだよ。不遜な態度はどこにいったんだ？」

「うつ……だつてさあ！」

いつものように強気に出ることもできず、恨みがましい目で望は俺を睨んだ。開場のときからこの調子で呆れているのだが、そんな望の気持ちも少しは分らないでもない。

すぐ前の観客席の空気が異様なのだ。用意された二百席の観覧券は予想を上回る競争率だったというし、あの事件以降も色々な意味で動向の注目された歌姫計画だから、仕方がないといえはそうなのかもしれないが、好奇心と興味本位の緋い交ぜになった声があちらこちらから聞こえてくる。

「なんか……品定めされるみたいで、気分悪いかも……」

「まあ、確かになあ……」

二人してげんなりと溜息を吐き出した。

しばらくすると、一分前のアナウンスとともに照明が絞られた。

ゆっくりとざわめきが引き、張りつめた空間が創り出される。

ステージ中央に佇むミクは俯いて、望は息を吞んで、その瞬間を待っていた。五秒前のカウントでミクが顔を上げる。不思議とぴたりと出会った視線に、俺が頷いてみせると、ミクもこくりと小さく頷きを返した。

用意した三曲とかが、いままでリリースしてきた曲とは全く違う路線。リベンジに必要なのは純粋なインパクト。そして歌姫として

人間らしくないから何だというのだ。当たり前だ、ミクは機械なんだから。そう開き直るのが、俺たちとミク自身の結論だった。

序盤で一時広がったざわめきを掻き消し、観客を自分の世界に引きずり込むミク。重々しい威厳の前に立つ彼女を、誰もが驚嘆の声すらも失って魅入っていた。

ラララ、ラララ、ラララ、ラー

Ｃメロで沸き立つ鳥肌。この曲の最高音をとてつもない安定感で伸ばしきる。

さらに大サビで転調。最も苦勞した曲を最初に持つてきたが、よく歌い切った。

二曲目は望の衝動で書かれた作品。今度は歌詞がメイン。普段は歌詞に注文をつけない俺が、望と散々討論して構築されたメッセーヂ。何をどう伝えるか。いつのまにかミクは表現力を身につけようとしていた。

人工の喉から声を絞りだすミクの姿。掠れたように聞こえるのは音が出ないわけではない。込められた感情が、そうさせている。

『.....』

二番のサビ直後、ミクの目から失われる光。歌唱指導のなかでも特に異様だったパートだ。どこまでも機械的に、それこそ恐怖を覚えるほどに、自己と他者にただ純粹な疑問をぶつける。何のために？



そして三曲目。ミクが作詞した草稿を基に、話し合いながら何度か書きなおしたという詞。前の二曲で与えた衝撃を和らげつつ、民族調の儚いメロディで包みこむ。

これは空っぽになった心に届ける、機械仕掛の詩。確かな想いがそこにはあった。

『ラララー、ラララー、ララ、ラーラーラ  
ラララーラ、ラーラーラ、ラーラーラ』

ミクが最後のサビを歌い終え、静かに流れる後奏のオルゴール。

誰も声を上げることが出来ず、ただ聴き入って、魅了されていた。歌姫の旋律と、精霊の輝きに

## 「2・3」 機械だけど（後書き）

ライブでミクが歌った曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになれましたら、是非お聞きください。

『龍ノ啼ク箱庭抛リ』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1804377>

『永久に続く五線譜』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1647289>  
YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=plawPCT0SXc>

『機械仕掛の詩』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1830240>  
YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=WGLltjUBSM>

### 「3・1」 賞の意義

トントン。

「はいはい」

春の陽が空高くから差し込む真昼時。木製の玄関扉がノックされて、望が応対に出た。

フィーネリア王国全土に流された生放送のスタジオライブが去年の秋口のこと。あれから制作環境は相変わらず、外界の評価だけが盛り上がって、立て続けにディスクのリリースをしている。気がつけば半年が過ぎていた。

歌姫候補としてのミクの名声は、もう十分すぎるほどに高まっている。さすがに先代の歌姫である叶には及ばないだろうが、実力はずまず。精霊歌を唄いこなせるレベルにはあるはずだ。だが何かが足りない。初めてミクの歌声を聴いた日、望や叶が願った「本当の歌」を唄うには、まだ何かが

「もしもおし、起きてるー？」

ぺちぺちと頬を叩かれて、はっと物思いから返る。

「あ、もう行ったか。誰だったんだ？」

「んー、これ。芸術協会からの郵便だけど、なんだろうね」

差し出された茶封筒を受け取って、さっそく封を切る。中に入っていたのは一枚の書状と数枚の書類だった。金字の飾りを施された高価な生地の書状には、簡潔な文言が記されている。

「……芸、術、賞？」

「え、嘘っ。おめでとっ！」

呆然とした俺の呟きに対して、望は驚きのあと祝福の言葉をかけた。望が素直なのは、芸術賞がそれほどに名誉な賞だからだ。

国立の芸術協会が毎年四月に選考を行い授与するのが芸術賞だが、前年度における作品で歴史に残るであろうと全会一致の採択がされたものだけが対象になる。このため「該当なし」という年度も少な

くなく、過去十年間で二度しか芸術賞は授与されていなかった。そしていずれも建築分野からの受賞だった。

フィーネリアにおいて、音楽分野での受賞は過去を遡ってもおそらく初なのではないだろうか。さらに言うなら、受賞者が人間でないという点も。

「えっ……初音、ミク？」

「ああ」

「そんな　なんでっ!？」

「いや、なんでってな。まあ当然といえば、当然だろ。一瞬、夢見たけどな」

書状を見た瞬間の驚きは本物だったが、これといって賞自体に興味があるわけでもないし、特にがっかりしたということもないので笑い混じりに言ったのだが、望にとっては重大な問題らしい。

「だって、ミクは機械なんだよっ？　何が出来るって、歌うだけじゃない！　あんたが曲を書かなきゃ、こんなに有名になるはずもなかったのに……そうよ、芸術協会も物珍しさで選んだのかも。もしかしたら、女王様が圧力をかけたとか。ねえ、そうじゃなきゃ可笑しいでしょ？」

「望、落ち着け」

「っ!！」

興奮していたところを窘められて、キッと俺を睨みつける。そんな自分に驚いたのか我に返って視線を逸らしながら、それでも望は悔しそくに唇を噛み締めていた。

「……ごめん。少し、頭冷やしてくるね」

望が家に戻ったのは、夕刻になってからだだった。出て行ったときよりは幾分かすっきりした顔をしていたが、俺が「おかえり」と声をかけてやると、気まずさ半分、恥ずかしさ半分で「ただいま」と笑った。

「さっきは、ほんとにごめんね。あたし嫉妬した。うん、たぶんそ

う」

ソファに寝転がって言葉を零す望を、俺は黙って見つめていた。

「あたしたち、ずっと二人で音楽やってきたわけじゃない？ まあベテランの人たちに言わせれば、まだまだひよっこなのかもしれないけど、何も言い返せないけどさ。でもね、いつもは謙遜してるくせに、自信あつたし。誰にも負けない詞を書いてるって。誰より良い曲をつけてもらってるって」

ずっと 実際には出逢ってから六年しか経っていないわけだが、不思議なほど音楽と望のいる日常に馴染んでしまつて、それまでの日々こそ夢のような気がしてしまう。

「なんか、なんだろ。ぼつと出つて言つちゃうとアレだけどさ、割り込んできたミクに、横から掠め取られたような、そんな風に思っちゃつて……最低だね、あたし」

「馬鹿。それが普通だろ」

「馬鹿つてなによ、バカ」

評価されたい。認めてほしい。気に入って貰いたい。誉めてほしい。そういう気持ちは人間が潜在的に抱く当たり前の感情だ。賞というのは、その渴望を叶えたひとつの形であるかもしれない。

身も蓋もないが現実として、何か特別に努力ができるわけでもない、才能がものをいう芸術においては、特に表出しやすい。いとも簡単に自分の限界が見えてしまう。しかしミクは限界を容易く超えてしまう存在だ。そう、人間じゃないから、機械だから。本来なら同じ土俵で比べること自体が間違っているのだ。

誰も望の言い分を責めることは出来やしない。だが望自身は責める。ミクに心があることを知っているから。それが確かなものだと知ってしまったっているから。

「まあ、なんだ。音楽やって一年のミクに負けるなんて、俺たちもまだまだだつてことだな。これからもずっと一緒にやってくんだろつし、頑張ろうぜ相棒」

「よくもまあ、そんな簡単に……」

根本的なところに関しては誤魔化し半分の励みだったのだが、それを指摘されるでもなく、何故か呆れたような溜息について苦笑されてしまった。

「なんか可笑しなこと言ったか？」

「いーえ、なんにもー。はいはい、頑張りましょうね。これからも、ずっと」

すっかり元の調子を取り戻したらしい望は、ふざけた口調で言うて、けれどその表情は明るかった。

望が感情的になって言ってしまった根も葉もないこと。芸術協会に圧力は通用しない。芸術の都として名を馳せるフィーネリアにおいて、聡明な芸術家たちを前に納得のいかない選出が出来ようものいからだ。だが、女王が直々に声を発したならどうなるのだろうか。疑いたくはないが「初音ミク」が芸術賞を獲るにはまだ早い気がした。芸術賞の芸の文字すら、俺の頭には浮かんていなかったのだから。ミクに対する いや、歌姫に対する女王の思い入れは強い。可能性としては十分ありえると、そう思えてしまう。

小市民の身でありながら、王宮を訪れるのは何度目のことだろう。畏れ多い気持ちは多分にあるが、何かにつけ入城しているので習慣づいてきた感覚もある。

さらに近頃では暗黙の了解になりつつあるが、正規の手順をショートカットして執政室へと通されるのも、特別な処置であると自覚していた。時折すれ違ふ大臣らの刺すような視線から、それが女王の独断であることが窺える。

「ご無沙汰しています」

「いらっしやいませ。どうぞお掛けくださいな」

軽い挨拶を交わして勧められるままにソファでくつろぐと、女王は執務の手を止めて俺と向き合った。

「まずは折角お越し頂きましたので、直接お祝い申し上げますわ。」

芸術協会における各賞の選考が終了し、昨年度の受賞について内部公開がありましたので、本日付で該当者に通知を致しました。あの子が芸術賞に選出されたということで、おめでとうございます」

「はい、ありがとうございます」

ミクのマスターとして、俺は恭しく頭を下げた。生みの親である女王の口上としては白々しくもあるが、その口振りに嫌味は感じられない。それはミクを育てあげた俺や望に対して敬意を払っているからだ、自惚れではなく理解している。

「正式な授賞式については通知の書類にあるとおりですが、授賞パーティーの詳細にしましては後日の顔合わせにてご報告いたしますので、どうぞよろしくお願い致します」

しかし理解しているからこそ、望の嫉妬とは違う側面から疑ってしまう。俺も女王も子供ではない。お互いの真意が別のところにあると知りながら、約束を交わし絆を結ぶ。当たり前のように、駆け引きをして利用しようとする。だが気分的には、裏切られたという想いに近いものがあるのも事実なのだ。

言葉ひとつで、俺は女王を盲目的に信じていたのかもしれない。

「受賞者および関係者各位との会談や茶話会も予定しておりますが」

俺が抱えていた迷いを断って視線を強くすると、それが伝わったのか女王は言葉を切って表情を崩した。受賞の祝福は本物だが、授賞式やらの説明は本題の前振りではない。

女王と俺たちの関係は、例えるなら実母と養父母のそれだろうか。どこかの違いのような気もするが。ともかくミクを挟んで譲れないものがあるのは同じだ。どちらの意見が優先されるかも判りきっている。

「茶番は止めましょう。本日のご用件は芸術賞についてですわね？ 異議申し立ては受け付けかねますけれど、それでも宜しければお伺い致しますわ」

たとえ信頼を置かれているとしても、一国の主に対しては失礼な

物言いだろう。論も根拠もなく、ただの違和感による詰問なのだから。それを承知の上で

「率直にお聞きします。ミクを芸術賞に推したのは貴女ですか？」

俺の単刀直入な文言に、女王は一瞬だけ目を見開いて、そして可笑しそうに笑った。

「ふふつ、驚きましたわ。それほど真っ直ぐに訊ねられてしまうとは思ってもありませんでしたから。わたくしのことを疑っていらつしやるのですか？」

会話の流れを止めることなく女王は自然な動作で席を立ち、俺に背を向けた。

「いえ、その……気分を害してしまわれたのなら申し訳ありません。ですが正直に言えば、奇妙だとは思っています」

「どうしてそう思われたか、なんて聞く必要はありませんわね」

女王の手によって金装飾の格子窓が全開になると、あの日テラスで感じたものと同じような春風が吹きこんだ。黄金の艶髪を揺らし、俺の肌を撫で、何処かへと消えていく。

「賞の意義とは、どのようなものだと思いますか？」

振り向いて問う。声色からも表情からも意図は読み取れなかった。説得ではなく、単なる個人的見解か。

少し考えて、言葉が纏まらなかったので首を振った。一言ではないとばかりに。

「受賞者の地位を高め、その権威を広く世に知らしめることですわ。芸術賞の名によって、歌姫として認知させる……あまりよろしくないことですけれど。精霊歌は心の声。神への賛美を主題とする聖歌とは違って、貴族のあいだでは軽視されがちですわ。精霊歌に限らず、他の学問でも、興味のない分野に対して自分の眼を持たない人々が多い。芸術賞という名だけで騙されてくれるなら……騙すと云うのは、偽物のようで歌姫に失礼ですわね。認めざるを得ない風潮を作れるのなら、それに越したことはない。そういう



ことです」

女王は鈴を鳴らして世話係を呼んでから、対面のソファに身を委ねた。手際に無駄なく、茶と菓子の用意がされる。背後で扉の閉じた音がして、お互いに一息ついた。

「あの子を賞に推したのか、という詰問でしたら『いいえ』と言って逃げることができます」

自嘲のため息を吐きだして、女王は続ける。

「ただそれでは不誠実ですわね。わたくしは『対象は個人でなくともよいのではないですか?』と進言しただけですわ。狭義で不特定多数の集団、広義で遺跡や不詳の作品、それから　ボーカロイドでも。歴代の芸術賞と比較して、芸術協会での評価はそれほど高くありませんでしたけれど。精霊を再現できたという事実だけでも、歌姫としての可能性だけでも十分だろうと、そう判断なされたのでしよう」

「……わかりました」

わかってしまった。女王が俺に解らせたのだ。

この一年、初音ミクが音楽業界を席卷していたことは間違いない。各賞の時期が来るたびに、話題の中心にいたのは彼女だった。だが賞を贈るべき対象がいなかったのだ。

歌姫計画の発案者である女王がいる。機械工学の分野ではあるが、歌声の基を作った開発者がある。直接プロデュースを担当した俺がいる。しかしそれは「初音ミクという芸術品」に関わる人間がいるだけで、アーティストではなかった。

初音ミクが各賞にノミネートすらされないことで、大衆の不信感は募っていった。どんな偉業を達成しても、人間ではないから賞を贈ることができない。これまでの各賞の担当者が抱えたジレンマだ。そういう意味で、各賞にも影響を与えるだろう女王の鶴の一声は、待ち望んでいた唯一の解決策だった。

初音ミクに賞を贈ることができる。何か賞を贈らなければならぬ。賞の意義について、歌姫として認知させる風潮を作れると女王

は言ったが、まさにその風潮を作りだしたのだ。

「わたくしを恨みますか？」

唐突に毀れた言葉。物思いから我に返ると、フィーネリアの太陽と謳われている女王が、寂しげな微笑を浮かべて俺を見つめていた。「一人では出来なかったこと。あの子を成長させ、歌姫として使える状態に仕上げることに。貴方は期待通りの　いいえ、それ以上の役割を果たしてくれました」

女王は取り繕うことを止めた。否、これは信頼だ。そう思い直すと同時に、歌姫計画が手の届く範囲を超えてしまったことを自覚した。

この一年、歌姫計画については調べていた。王宮の内部情勢も気にかけていた。女王は、孤立していたのだ。平和の都フィーネリアは、不思議なことに下院議会によって支えられている。権力や欲望が渦巻く王宮で、まるで台風のように曇りなく在る女王を支持したいという民衆の声が、大きな力となっているのだろう。それでも女王にとっては、もっと近くに味方が欲しかったに違いない。想いを共有し、実行することができる　願いを叶えてくれる　そんな存在が。

ここから先、俺や望は女王の駒でしかない。だがその何が不満だろうか。クリエーターは何時だって使われる立場だ。俺たちは芸術の原石を磨くだけ。実際に輝くのはアートであり、アーティストなのだ。想いに共感できるなら、ミクが輝いてくれるなら、それでいい。

「……いいえ。一年前は応えられませんでした。いまの俺には貴女の信頼に応える準備と覚悟があります。その前に、ひとつ質問してもよろしいでしょうか」

「ええ。なんなりと」

「歌姫計画の結末は何処にあるのですか？」

きつと女王の脳裏には描かれているであろう未来。ふたたび精霊歌が聴きたいと、そう願った先に何があるのか知っておきたかった。

「……世界平和、と言ってしまうと笑われるのかしら。二度とクレス公国の悲劇を起こさないために、この国のような芸術による幸福を皆に感じて貰いたいと。主としては似つかわしくない世迷い言を、本気で想っているだけですわ」

「他に政治的な方法もあるように思えますが、どうして芸術をいえ、音楽を選んだのですか？」

「わたくしが音楽を愛しているから、という理由ではダメでしょうか？」

一年前と同じ答え。だがそれが純粋な真実だということを理解できた。だから

「……こんなとき、どうするべきなのか知りません。ですので、故郷の形式で失礼します」

「えっ？」

女王のもとへ歩み寄ると、おもむろに跪き、左手を取って頭上に掲げ上げる。

「その崇高なる目的の達成のために、阻むもの全てを断ち切る剣となり、迫るもの全てを弾き返す盾となり、命ある限り貴女様にお仕えすることを誓います。フィオナ様」

面を上げた俺は、放心した様子 of 女王を垣間見た。目元を潤ませ、取られた手を大事に包むように右手を重ねてくる。

「……ありがとうございます。貴方の命、お預かりしますわ。何が起きようと裏切りません、絶対に」

### 「3・2」 歌姫の意志 part・1

芸術賞の発表から数週間を経て、各界の著名人や貴族らを招いた受賞パーティが国民の休日に関かれた。芸術協会で先立って執り行われた厳粛な授賞式とは違い、立食形式で舞踏会を兼ねた優雅なものとなっている。

ダンスパートが一区切りしたところで、ミクがステージに上がった。例年では王宮付きの楽隊による演奏がパーティを彩るのだが、今年は音楽分野からの受賞があったことで進行にも手を加えたい。

『ララララ、ラーラー、ララララ、ラーラー  
ララララ、ララララ、ララララーラー、ラララー』

有名なジャズバンドの演奏にミクが軽快な歌声を乗せる。この日のために新調したポップなナンバーだが、階下の反応を見る限り、初披露でも好評を得ているようで安心した。

そうして人気の少ない二階脇からステージを眺めていると、赤ワインの注がれたグラスを片手に、黒一色でドレスアップした望が近寄ってきた。

「主賓サマが、こんなとこで何してるのかなあ？」

「感傷に浸ってた……とでも言ったら笑うか？」

「あっはっは」

「なんだそりゃ」

せっかく会場の雰囲気に合わせて洒落た会話でもしようかと思えば、これだ。望にシチュエーションを気にするような乙女心はないものか。

「それにしてもまあ、ようやくここまできたって感じね」

「……そうだな」

ステージに目を戻して肯くと、ふっと笑みが零れた。ミクがバンドマンとアイコンタクトを取りながら、楽しげに間奏のスキヤット

を口ずさんでいる。

今日の本番を迎えるまでに何度かの打ち合わせとリハーサルを経  
ていた。これまで狭い世界で活動してきたミクだ。歌という形で想  
いを届けることはあっても、面と向かって言葉を交わした人間は少  
ない。人見知りというので上手くコミュニケーションが取れるのか  
心配でもあったし、いつかのライブのような目に遭うのではないか  
とも危惧していた。

だが幸いと言っていいのか、女王の思惑どおり芸術賞の名には効  
力があつたようで、相手もプロであるから（内心の戸惑いはあるに  
しても）それほど抵抗なく「初音ミク」は受け入れられたようだっ  
た。そしてなにより、ミク自身が俺たち以外の人間と交わす音楽を  
楽しみ始めたのは大きかった。

「ラララー、ラララララ

ラララ、ララララーラ、ラララーララー、ララララーラ」<sup>□</sup>

真鍮の欄干に寄り掛かって、グラスを傾けながらミクのステージ  
を眺める。まるで巢立つ雛鳥を見守る親鳥の心境だ。

本当に、ここまでできてしまった。はつきりとは解らない何か  
をやり遂げた達成感と、少しの寂しさが入り混じった不思議な表情  
を、望と二人して浮かべていた。

「……これから、どうなるのかな」

望の言葉に不安の色はなかった。ただ未知に対する疑問が口をつ  
いただけなのだろう。

「……さあ、どうなるかな」

答えを持たない俺は、ただオウム返しにそう言うしかなかった。  
しかし望と違うのは、心の片隅に微かな不安が影を落としているの  
を、確かに認めていたことだった。

「3・2」 歌姫の意志 part・1（後書き）

ステージでミクが歌った曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになれましたら、是非お聞きください。

『ミラクルペイント』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1588476>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=n5oJzBPYhNU>

n5oJzBPYhNU

### 「3・2」 歌姫の意志 part・2

『ラララー、ラララー、ラララ

ラララー、ラララー、ラララ

ラララー、ラララー、ララララ、ラララー』

バックミュージックはノリのいいクラブナンバーに変わっている。とあるカクテルを題材にした、お洒落な一曲だ。パーティ用に甘めに仕上げたクローバークラブ ジンをベースとした淡いピンクのカクテル を曲の間中ウェ이터が配り歩いていた。

ふと見覚えのある後ろ姿が目についたので、通りがかりにグラスを二杯貰って足を運ぶ。純白に金刺繍のドレスが他の来賓客と比べて煌びやかだというわけでもないのだが、やはり威厳を纏って彼女は佇んでいた。

「ごきげんよう、フィオナ様。一杯いかがですか」

「あら、ごきげんよう。ふふっ、意外ですわね」

振り向いてグラスを受け取った女王が可笑しそうに言うので、そこでようやく相当に気障なことをしていると気付かされた。先日的一件があった後とはいえ、女王陛下に対して馴れ馴れしすぎだ。あまりの恥ずかしさに顔を赤くする。

「主賓席でお見受けしなかったので、わたくしも探していたところですよ」

「どうもこういう場合は苦手で……ご挨拶が遅くなつてしまい申し訳ありません」

「お気になさらないくださいな。王宮からは身の回りの者以外に来ていませんし、無礼講で構いませんわ」

言われてみれば、内外を問わず大抵の行事で顔だけは見かける大臣たちと、今日は鉢合わせしていなかった。息が詰まること請け合いなので構わないのだが。

「珍しいこともあるんですね」

「ええ、まあ……」

こちらも珍しいことに女王が口ごもる。

「どうかしましたか？」

「……歌姫計画は王宮であまり歓迎されていないものですから」  
女王の困ったような笑みを見て、触れるべきではない話題だったのだと、申し訳なく不甲斐ない気持ちになった。

「私利私欲のために芸術協会を懐柔した、だなんて噂まで……  
嘘八百というわけでもありませんから、否定もできませんわね」

「フィオナ様……」

「嫌ですわ、わたくしつたら。ごめんなさい。せつかくのお祝い事ですもの、暗いお話は止めに致しましょう」

主従の儀を交わした日以来、こうして女王と向かい合うことが多くなった。人前では毅然としている女王が、弱い部分も本音で曝け出してくれるのは嬉しいことでもあるが、身分の違いゆえにどのようなもないことばかりで、齒がゆさを感じてもいる。俺に解決できる事柄など全くないと言っていいだろうから。それでも、わずかでもいいから力になりたいと強く想う。

「実際にご覧になって、どうですかミクは」

俺の報告で話を聞いたり、ディスクで歌声を聴いたりしても、女王がミクと触れあうのは久しぶりのことだ。いままで女王の目に留まるような舞台には立ったことがなかったから。

「そうですね……」

愛娘を見つめる母のように、女王はミクのステージを眩しげに見やっつて笑顔で答えた。

「とても、成長しました。歌姫としての力は勿論のことですけど、人間としてよく成長したことが伺えますわ。望さんのおかげでしょうか？」

「師弟というか、姉妹というか。俺よりも望のほうがマスターらしいですよ。あいつがミクを育てたようなものですから」

いままでも振り返って苦笑する。本当に俺は何もしていないな。



「姉妹……そうでしたわ。今夜はサプライズを用意してありますの。どうぞご期待くださいな。望さんにもよろしくお願い致しますわね」  
何が「そうでしたわ」なのか解らないが、思い出したように、しかしわざとらしくも感じる口調で女王が言う。

「サプライズ、ですか」

「ええ。きつと喜んで頂けると思いますわ」

打ち合わせでは聞き覚えのない話で、心当たりはまったくなかった。だがまもなく、俺たちは女王の意味深な言葉を理解することになる。

「3・2」 歌姫の意志 part・2（後書き）

ステージでミクが歌った曲は、既存のオリジナル曲を参考にさせて頂きました。

もし興味をお持ちになれましたら、是非お聞きください。

『クローバー・クラブ』

ニコニコ動画

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1937053>

YouTube

<http://www.youtube.com/watch?v=DIFuDWJv5Vs>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8291e/>

---

初音ミクの物語

2010年12月5日19時40分発行